

## 張作霖爆殺と西安事変

## 張作霖・張學良と日本

儀我壯一郎  
(名が、そういちろう)

張作霖爆殺と軍国主義日本 二〇〇八(平成二〇)年六月四日は、中華民国期の奉天軍閥・張作霖(後に北京政府を支配する安国軍大元帥)の没後八〇周年の祥月命日である。その三日前の六月一日(日)に、東京神田の学士会館で、八〇周年記念の研究集会が開催され、私も爆殺事件の真相を報告する。公的・私的理由は次のとおりである。

一九二八(昭和三)年六月四日の早朝、北京から奉天(瀋陽)に帰還する張作霖大元帥坐乗の特別列車が、瀋陽駅に近い皇姑屯で、満州駐在の関東軍高級参謀・河本大佐(後に首謀者とする謀略の中心)、爆破された。張作霖は瀕死の重傷を負い、数時間後に、奉天城内の自宅で憤死した。

同じ車両の中で、張作霖と同行中の

一九三三年の「五・一五事件」(犬養毅首相他を殺害、一九三六年の「二・二六事件」(岡田啓介首相他を襲撃、閣僚などを殺害)などによる軍部独裁への道を切りひらき、「満州事変」と一九三七年七月の「盧溝橋事件」後の戦争拡大への火蓋を切った。敗戦にいたる暴挙の連鎖への出発点であった。

張學良と蔣介石・蔣介石 張學良(一九〇一—二〇〇二年)は、奇しくも昭和天皇と同年生である。若き日に、人を救済者になつたといわれ、張學良は、父作霖の強い要望で英才教育を受け、軍人への道を進んだ。一九歳の時、軍人養成の東三省講武学堂(砲兵科)に入學。郭松齡戦術教官の民主主義・民族主義思想が多くを學んだ。

一九二二年訪日。当時、よく似ていた皇太子(後の昭和天皇)と面会。参観した日本軍の威圧的雰囲気には反発した。また、最晩年の孫文(一八六六—一九二五年)と面談して深く傾倒した。一九二八年の「易幟」の素地は、すでに出来ていたのである。

一九三〇年春、閻錫山・馮玉祥・李

私の父親・張作霖の軍事顧問・儀我誠也陸軍少佐(陸士二期、後の「満州事変」の首謀者石原莞爾と同期。陸大三期)は、敗戦時の陸相阿南惟幾と同期)は、間一髪の差で軽傷。九死に一生を得た。父親の危機と一見限りでは、張作霖の長男・學良と、誠也の長男の私は、同じ立場であった。奉天の日本人小学校三年生の私は、当日早朝の爆音に驚いたものの政治的背景を理解せずよくもなかった。数え歳二八歳の張學良は、前線から装束して急遽奉天に戻り、周到な配慮で関東軍に侵略的軍事行動の口実を作らせた。

民政党若槻首相と幣原喜重郎外相を「軟弱外交総裁」と批判した田中義一首相(政友会総裁、予備役陸軍大將)は、満蒙を日本の実質的支配に囲い込むことを熱望し、張作霖政権を利用しようとしていたが、張作霖の急死でその思惑は外れた。しかし、田中政権は国民政府の満州・東三省支配を阻止するために、張作霖の後継者を張學良に圧力を加え続けた。張學良は、日本軍への怒りを表に出さず日本政府の妨害を排除して、同年二月二十九日に「易幟」に

宋仁が反蔣介石の軍事行動を起し、蔣介石の中央政府軍との「中原大戦」が始まった。同年九月一八日、張學良が蔣介石の側に立つたので「反蔣連合」は敗北した。その功績で張學良は国民政府の陸海空軍副総司令に就任した。しかし、張學良は、すでに国民政府の「争權奪利」の実態に気付いていた。そして、奇しくも翌二年九月一八日開始の「満州事変」によって、東三省さらに熱河省を日本軍に奪われ「不抵抗將軍」の汚名を看せられた。一九三三年三月、張學良は下野し、ヨーロッパに外遊する。当時、蔣介石は、一九三〇年七月の「長沙ソビエト」成立などの状態のなかで、反共作戦に力を注ぎ、張學良政権に協力しなかった。一九三三年四月、中華ソビエト政府(瑞金)は、「対日戦争宣言」を発した。

張學良と蔣介石の「西安事変」 一九九〇年に、張學良が語った。「蔣先生と私とは、感情的には兄弟だったが、政策は違つていました。……蔣先生は「安内攘外」を主張しました。これに対して、私は「攘外安

内」を唱えたのです。「私は、まず、先に外、つまり日本と戦い、それから国内を安らかにしようと考えました」(NHK取材班・白井勝美「張學良の昭和史最後の証言」角川書店、一九九一・平成三年、一七九—一八〇頁)。

一九三四年一月、ヨーロッパから帰国した張學良は、一九三五年西北剿匪副司令に任命されたが、部下の東北軍の精銳は共産党側の反撃で大敗北をくりかえし、帰還した捕虜は、内戦停止、一抗日日を訴えた。同年二月九日には、北京で抗議を求めた学生たちの大規模のデモが行われ、抗日の気運は全国的に高揚した。

張學良の「攘外安内」の撤回の建言は、蔣介石に拒否された。ついに一九三六年二月二日、西安近郊の華清池で、張學良は楊虎城と協力して督戦に來ていた蔣介石を監禁。周恩来、宋美齡その他の活動があり、蔣介石指導の抗日統一戦線結成への活路が切りひらかれた。翌年七月七日の盧溝橋事件の後、九月には第二次国共合作が本格的に成立するのである。

(大阪市立大学名誉教授)